

教科書の中の性差別

——日弁連グループの批判以後変ったか——

田 中 欣 和
田 中 欣 和 ゼミ

はじめに

- I 小学校国語教科書
 - II 中学校国語教科書
 - III 道徳副読本
 - IV 高校日本史B教科書
- おわりに

はじめに

日本弁護士連合会女性の権利に関する委員会に属していた伊東良徳・大脇雅子・紙子達子・吉岡睦子の四氏が、当時の小・中学校教科書を点検し、『教科書の中の男女差別』（明石書店、一九九一、以下日弁連グループの仕事等というときは同書を指す。）を著した頃、教育関係者の多くは、それまで見逃してきた点を突きだされた思いであつ

たろう。日弁連グループは、例えば国語教科書に出て来る作品の「主人公」の性別を教えるという、単純といえば単純な方法によって、教科書が男中心社会を露骨に反映していることを鮮やかに示した。一九八九年用小学校国語教科書の物語文でいえば、市場占拠率上位五種のもので男性主人公七二・九%、女性主人公は二七・一%という比であった。

こういう教科書の構成は意外なほどに気づかれにくい。一九八七年に関西大学人権問題研究室が行った関西大学学生対象の調査でも(自分の小・中・高時代をふりかえって)「出席簿は男が先になっていた」(「全くそうであった」八六・五%)や「生徒会長やクラス委員長には男子がなることが多かった」(「全くそうであった」三五・七%)と異なり、「教科書で読んだ小説や物語の主人公には男性が多かった」(「全くそうであった」五・八%)は、あまり明確には認識されていない。

日弁連グループの本が出てから十年を超える月日が経過した。その後は教科書は変化したのであろうか。私の知る限りでは追跡研究をした人はいない。部落問題を軸として教育研究を続けてきた私の認識では、「戦後教育における部落問題の欠落」が批判されるようになってから、教科書はそれなりに変った。多分に紋切型の変化ではあったが、教科書会社は批判を受けとめて対応したのである。この業界も激しい競争の場であるから教育界の雰囲気の変化を気にしないはずはあるまい。まして今や「男女共同参画」は体制タテマエことばになった感さえある。部落問題のインパクトより影響は全国的でもある。出版する側が意識しないはずはないが、教科書自体は変ったのかどうか、これは推測ではなく、調べてみる必要がある。

日弁連グループの方法をお手本にすれば、手間はかかるが学生でもできることである。卒業論文でどうか誘うと、まず二〇〇〇年三月卒業の田中奈緒美、藤田由典の両君が、国語教科書の分析をやってくれた。二〇〇二年三

月卒のゼミ生は三回生の時に分担して道徳副読本の分析をやり、中学校は松浦未来、小学校は大辻俊作がまとめた。日弁連グループの仕事との比較という訳ではないが、二〇〇二年三月卒の宮沢太一は日本史B教科書の分析を卒業論文とし、「大学生が五分間で想起できる歴史上の人物」調査も含めた。

本稿は以上の卒業論文・宿題レポートを基礎に演習・卒業演習の担当であった田中欣和がまとめた。仕上げの足りない部分は田中欣和が加工などしたが、本稿の取り柄である資料部分は手間のかかる作業をやってくれた学生諸君の功績である。

日弁連グループの『教科書の中の男女差別』が分析対象としたのが一九八九年用教科書であったので、小・中学校の国語と道徳については、ちょうど十年後の一九九九年用の対応する教科書・副読本を分析し、比較することにした。(道徳では対応するものが入手できないものもあった。)高校日本史Bについては、十年前との比較を意図したものではない。大学入試課で不用になつて教職課程研究センターに回してくれたものうち、比較的新しく、かつ学生に貸してもいいものを考えると一九九七年用になつた。

I 小学校国語教科書

すでに述べたように、田中奈緒美による小学校国語教科書の分析は、一〇年前の教科書の日弁連グループによる分析と比較するつもりのものであるので、教科書も同じ出版社のものになつた。光村図書(以下光村と記す)、教育出版(以下教出)、東京書籍(以下東書)、学校図書(以下学図)の九九年度用である。方法も、性別分析で主人公が男女双方と考えられる場合は〇・五ずつにするとか、動物が主人公という場合も数えるなど、同じルールによつた。

小学校教科書とはいえ、五社×六学年×上下二冊で六〇冊を対象として分析し、まとめることになる。総ページ数は六、九六二ページで、そのうち物語と説明文が三、四四六ページと約半分、あとの三、五一六ページは、詩歌、児童作品、文法的説明、手引などとなる。

1 作者・筆者の性別比率

物語文の作者では、女性が八九年の約三割からかなり増加して約四割になっている。説明文では、同じ期間に女性執筆者は、八・二%→一二・二%と伸び率はかなり高いが、絶対数では少ない。説明文の内容と対応してみると、男は自然科学関係、女は言葉に関するものが多い。現在までの研究者等の領域別分布が反映していることもあろう。田中奈緒美は「科学の分野などは男性中心」と子どもに思わせてしまうことを心配している。

出版社別にみた表Ⅰ-3では、やはりちがいがあることが判る。日書では説明文で女性筆者がゼロである。

表Ⅰ-1 物語における作者の性別（作品数、ページ数）

		男性	男性比率	女性	女性比率
物語 作品数	1989年	127話	68.3%	59話	31.7%
	1999年	113話	58.5%	80話	41.5%
物語 ページ数	1989年	1641 <small>話</small>	69.2%	731 <small>話</small>	30.8%
	1999年	1420 <small>話</small>	59.9%	952 <small>話</small>	40.1%

表Ⅰ-2 説明文における筆者の性別（作品数、ページ数）

		男性	男性比率	女性	女性比率
説明文 作品数	1989年	90編	91.8%	8編	8.2%
	1999年	86編	87.8%	12編	12.2%
説明文 ページ数	1989年	683 <small>編</small>	91.8%	61 <small>編</small>	8.2%
	1999年	644 <small>編</small>	86.3%	102 <small>編</small>	13.7%

* 男女共同執筆のものは、男女半々に振り分けた上算出

表 1-3 出版社別にみた作者の性別の比率

	光村図書	教育出版	東京書籍	学校図書	日本図書
物語話数	44話	36話	37話	42話	40話
男 性	(61.4) 27話	(54.3) 19話	(51.4) 18話	(61.5) 24話	(62.5) 25話
女 性	(38.6) 17話	(45.7) 16話	(48.6) 17話	(38.5) 15話	(37.5) 15話
無記名等		1話	2話	3話	
物語話数	557話	450話	435話	502話	484話
男 性	(62.5) 348話	(54.7) 243話	(57.8) 237話	(61.6) 294話	(61.6) 298話
女 性	(37.5) 209話	(45.3) 201話	(42.2) 173話	(38.4) 183話	(38.4) 186話
無記名等		6話	25話	25話	
説明文数	29話	31話	31話	24話	31話
男 性	(88.0) 22話	(90.9) 20話	(81.8) 18話	(84.2) 16話	(100) 10話
女 性	(12.0) 3話	(9.1) 2話	(18.2) 4話	(15.8) 3話	(0) 0話
無記名等	4話	9話	9話	5話	21話
説明文話数	177話	24話	215話	185話	200話
男 性	(89.0) 137話	(88.4) 167話	(78.9) 138話	(83.3) 130話	(100) 72話
女 性	(11.0) 17話	(11.6) 22話	(21.1) 37話	(16.7) 26話	(0) 0話
無記名等	23話	52話	40話	29話	128話

* () の中は、比率

児童作品では、全体で男の子が四四・五％、女の子が五五・五％である。出版社別では学図の女子比率六三％が最大、東書の四七・五％が最小、他の三社が五〇％台だったから五社中四社で女子が過半数となる。説明文プラス物語の筆者性別はおよそ二対一である。

2 物語の主人公

物語の主人公の女性比率は、八九年度用二七・一％から二二・四％へ四・七ポイント落ちている。ページ数も同じく四・七ポイント下がった。(二六・四％→二一・七％) 出版社別で主人公の女性比率(作品数)をみると日書の二七％が最高、東書の一七・六％が最低で他は二〇％台前半であった。

表1-5の学年別では一年生用が特に男性比率が高いが、田中奈緒美は「昔話や民話が多く、性別の判断ができないものも多い」ことと関連づけて解釈している。出版社別の多少の差も内容と関連づけて考えるべきであろう。

表 I - 4 物語の主人公の性別

		男 性	女 性	男女とも	主人公なし 性別なし
1989 年度用	作品数	127話	45話	7話	22話
	%	72.9	27.1		
1999 年度用	作品数	137話	37話	7話	18話
	%	77.6	22.4		

*比率は、主人公なし・性別なしを除き、男女とも主人公と思われるものは男女に半分ずつ振り分けて算出

表 I - 5 学年別にみた物語の主人公の性別

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
物語話数	34話	34話	32話	33話	35話	31話	199話
男 性	21話	24話	20話	22話	27話	23話	137話
女 性	2話	6話	6話	8話	7話	8話	37話
男女とも		3話	2話	1話	1話		7話
主、性なし	11話	1話	4話	2話			18話
男性比率	91.3%	77.3%	75.0%	72.6%	78.6%	74.2%	77.6%
女性比率	8.7%	22.7%	25.0%	27.4%	21.4%	25.8%	22.4%
物語話数	297話	371話	339話	440話	537話	444話	2,428話
男 性	199話	274話	216話	306話	405話	347話	1,747話
女 性	21話	60話	61話	104話	112話	97話	455話
男女とも		30話	23話	11話	20話		84話
主、性なし	77話	7話	39話	19話			142話
男性比率	90.5%	79.4%	75.8%	74.0%	77.3%	78.2%	78.3%
女性比率	9.5%	20.6%	24.2%	26.0%	22.7%	21.8%	21.7%

表 I - 6 男女別にみた物語の主人公の内訳

		成 人	子 ども	成 獣	動物の子
1989年	男性主人公	58話	36.5話	11話	15話
	女性主人公	13.5話	29話	6話	0話
1999年	男性主人公	57話	42話	10.5話	27話
	女性主人公	6話	32話	1話	1話

*男女とも主人公と思われるものは、それぞれ0.5ずつ配分

表1-6のように主人公の内訳でみると、人間の子どもの場合には男女差が比較的小さいことが判る。八九年度との比較でいえば、成人・成獣の女・牝の減少が全体としての女性比率低下の主因である。

出版社別に人間が主人公の場合の女性比率をみると、九九年用では、日書三二・〇%、光村三〇・四%、教出三〇・〇%、学図二三・一%、東書二二・二%の順であり、八九年用で最高の三七%だった教出は低下、東書や学図と並んで低かった光村は上昇している。

3 主人公と主人公の親の性別と職業

表1-7のように、成人主人公の場合は、八九年用でも男女とも七割前後は有職者として描かれていた。九九年用では女性主人公は数は減少したが全員有職となつている。(職業の内容については後述)

主人公の親として描かれる場合は、職業が示されていないことも多く、男女差も大きい。作者の立場で考えると、子どもが主人公であれば、親の職業を示す必要の感じられないことも多からう。それでも八九年用と九九年用を比べると父親はあまり変わっていないが、母親の職業が示されるものは七・五%↓二四・一%と大巾に増えている。教科書会社が、日弁連グループ等の批判をそれなりに意識していると思われる傍証の一つである。

表1-7 主人公、主人公の親の有職者(男女別)

	1989年度			1999年度		
	全 体	職業あり		全 体	職業あり	
成人女性	13話	9話	69.2%	6話	6話	100%
成人男性	58話	43話	74.1%	57話	55話	96.5%
主人公の母	(人53) 60話	4話	7.5%	(人54) 64話	13話	24.1%
主人公の父	(人46) 50話	19話	41.3%	(人44) 51話	20話	45.5%

*主人公の親での有職者の比率は、人間での割合

表 I - 8 挿絵にみる職業人の性別

	男 性		女 性		
	全 体 人 数	人 数	比率 (%)	人 数	比率 (%)
1989年度用版	396	295	74.5	101	25.5
1999年度用版	421	316	75.1	105	24.9

主人公の女性の職業の内容とみると、八九年用で結婚後も働いている五話のうち、農婦・機織りが四話であとの一話が科学者であった。九九年用の六話でも農婦・機織りが四話では生物学者と詩人である。職種も多様化している女性の現状が教科書に反映して来るのはまだ先のことなのであろうか。

主人公・主人公の親を含め、また成人に限らず、ともかく有職者の出て来る話の男女比率では、八九年用が七三・八%と二六・二%、九九年用で六九・四%：三〇・六%であり、女性が少ないだけ上昇している。女性の職業の内容を九九年用全体でみると、農婦・機織り・糸紡ぎが計二四、教師が一〇、商店・行商あわせて六、ただ「つとめ」とするもの三、秘書、洋裁学校の住み込み、生物学者、詩人が各一となる。

挿絵で判別可能な職業人をひろくと表 I - 8 のようになり、八九年用とほぼ同様である。職業内容も教師・家庭教師で四一・〇%、農婦・機織り三〇・五%、商業一一・四%看護婦・保健の先生で七・六%等であり、八九年用の傾向と大差はない。昔話などが多いからとはいえず、古くて狭いといわざると得ない。

4 家事分担

物語文で家事を行っている場面を全体的話数で割った割合と家事内容を性別・立場別で分析したのが、表 I - 9 である。男の主人公が家事を行う例が増えている。また、子どもの主人公では男女とも増えている。

表 I-9 主人公、主人公の親の家事をしている紹介

教科書の中の性差別	1989年度	家事数	%	
	1999年度	／話数		
主人公 成人男性		2／58	3.4	娘と買い出し、山の中での炊事
		7／57	12.3	サンドイッチを作る2、いかだの修理、水くみ、食事の用意、動物の世話、火をおこす
主人公 成人女性		5／13	38.5	炊事3、編物、水くみとマッサージ（他に、「台所から顔を出して」というのが1話ある）
		1／6	16.7	炊事
主人公の 父親（人間）		1／46	2.2	ペンキ塗り
		2／44	4.5	ペンキ塗り、山小屋づくり
主人公の 母親（人間）		16／53	30.2	裁縫・編物7、炊事・配膳5、洗濯3、花の世話1
		16／54	29.6	炊事・配膳5、裁縫・編物5、掃除2、洗濯2、買い物、山小屋づくり
主人公 男の子		4／33	12.1	食事の支度、掃除、ペンキ塗り、車の掃除などの手伝い
		7／40	17.5	買い物、風呂焚き、水運び、ご飯の仕度、動植物の世話、ペンキ塗り、たけのこほり
主人公 女の子		6／26	23.1	炊事6
		11／30	36.7	買い物5、炊事5、いちごつみ、ひきうす手伝い、裁縫、蒲団をたたむ、届け物（4話で、買い物、炊事が重複）

内容をみるとやはり男は屋外作業が多い。主人公の母が多様な伝統的家事をこなしているのに対し、父の方はペンキ塗りや山小屋づくりなどが象徴的である。とはいえ男が食事の用意をする例が増加するなど、編集者の改善の意図はみえる。男の掃除、洗濯、裁縫はゼロであったが。

挿絵で家事が描かれている場面をまとめたのが、表 I-10 である。全体としては男の家事場面が相当増加している。ただし、その増加は男の子の家事が女の子以上に多く描かれるという変化によるものであって、成人の男の家事はほとんど増えていない。成人については現実の反映、子どもについては理想の反映とみることもできよう。

父・母と判定される絵のうち、エプロンあるいは割烹着をつけている姿は表 I-11 にまとめられている。八九年と大差ない。

表 I - 10 挿絵にみる男女別の家事の割合

	全 成 人 子 ど も	男 性 成 人 男 性 の 子	%	女 性 成 人 女 性 の 子	%
1989年 度用版	76	15	19.7	61	80.3
	37	5	13.5	32	86.5
	39	10	25.6	29	74.4
1999年 度用版	94	39	41.5	55	58.5
	36	6	16.7	30	83.3
	58	33	56.9	25	43.1

表 I - 11 挿絵でエプロンまたは割烹着姿の父母

	父の絵	うち、エプロン または割烹着	母の絵	うち、エプロン または割烹着
'89年	62	1 (1.6%)	99	28 (28.3%)
'99年	50	0 (0%)	76	25 (32.9%)

表 I - 12 挿絵での家事場面 (性別)

	男だけ	女だけ	男女とも	男計	女計
'89年	8	24	11	19	35
'99年	17	29	18	35	47

表 I - 12 でみても男の家事は「男だけ」の場合も「男女とも」の場合も増えている。

5 男の子・女の子のステレオタイプ

田中奈緒美は、性格設定として「弱い女の子」がやはり多いことが気になるという。もつともステレオタイプを脱した男の子・女の子の画像を意図的に描いたと思われる教材も増えてはいる。物語でのステレオタイプの方から取り上げよう。

東書三年の「水玉」は給食前の手洗いでとおるとマリ子が隣あわせて並んだ場面である。へマリ子の水玉もようの服を見たとおん、とおるは、いたずらな服を思いついた。マリ子にむけて、びしよびしよの手をふり上げ、「そら、水

玉だ。水玉だぞ。」しぶきをばつ、ぱつとまきちらしたのだ。新しい服をぬらされて、マリ子はたちまち泣き顔になった。とおるは、先生にしかられ、後でマリ子に、「ごめんね。」とあやまった。いたずらな男の子、泣かされる女の子という古典的ともいえる配置である。実際の授業では「ごめんねと謝ったところはエライ」などとの感想がひきだされるのではあろうが。

日書二年の「えんびつびな」は、「おれ、べんきようだめなんだ。よろしくな。」はじめての日、シンペイちゃんは人なつこそうに言いました。そして、「これ、やるよ。」と、つくえの上に、みどり色のものをおきました。何だろうと思つて顔を近づけたら、とたんに、それがとびついてきたんです。「きゃあつ。」わたしはびつくりしてとび上がつてしまいました。どつとわらい声がおこりました。シンペイちゃんは、いそいでかえるをつかまえました。「なんだ、こんなかわいいものがごわいんかよ。」そう言いながら、ゆび先で、かえるの頭をやさしくなでました。わたしは、なかなかふるえが止まりませんでした。きつと、顔もまつさおだつたと思います。あんなにびつくりしたことはありませんでした。でも、シンペイちゃんがいじわるでそんなことをしたのではないのは、まもなくわかりました。とかいから来た私を、ほんとうにかんげいするつもりで、「いいもの」をくれたらしいのです。シンペイちゃんは、なかなか友だちができないでいるわたしに、親切にしてくれました。」という所がある。

男の子对女の子に都会対非都会を重ねた上で、双方の理解が深まる過程と読むこともできよう。

教科書は人畜無害のものばかりが望ましいとも思えないし、「えんびつびな」もそれ単独の評価として悪い教材ではない。しかし、大きな声で言う男の子とやさしい声で言う女の子（日書二年「ろくべえまつてるよ」）、冷たいのを我慢する男の子と泣く女の子（教出三年「りんごの花」）、力いっぱい豆をまく男の子ともじもじしそつと豆をまく女の子（教出三年「おにたのぼうし」）、元氣そうな男の子とかわいい女の子（光村、学図、日書四年「しろいぼ

うし」などの対置が多く、女の子が主人公のものでも、おにぎりがないと言って泣く女の子（光村、教出、東書、日書四年「一つの花」）、おひなさまがないと言って泣く女の子（教出三年「お母さんの紙ひな」）、お姉さんと呼ばれて恥ずかしがる女の子（光村六年「石うすの歌」）等と並べてみると、個々の作品評価を超えて教科書全体の組み立てとしては、「我慢強くて、意地悪で、元気なのは男の子であり、女の子はすぐ泣き、恥ずかしがりやらしい」と田中奈緒美が概括するようなステレオタイプ形成の働きをしているという危惧は根拠あるものといえよう。

男女の伝統的ステレオタイプを示す作品を一切教科書から排除することはできない。そうすれば実社会でのステレオタイプと別の教科書内ステレオタイプができるであろうが、それで子どもたちが実社会で葛藤をのり超え、現実を変えて行く力を養えるとも思えない。この節での批判は編集者のバランス感覚への危惧からであるとひとまず述べておく。

次に示す「赤い実はじけた」（光村六年）はどうであろうか。（哲夫君はおつかかない。そんな先入観があつて、「魚進」にだけは買ひ物に行かなかつた。町外れにある「魚進」が哲夫の家。……「らっしやい。」店の前まで来て、綾子にはげ出しそうになつた。大声でむかえてくれたのは、哲夫だつたのだ。「なんだ、米田じゃないか。」哲夫の顔がくしゃつとなる。哲夫は、長ぐつに黒くて長いゴムのエプロン姿。学校で会うイメージとはちがつて、一人前の魚屋に見える。「米田、いつもうちで魚買って来てんのか。」「えつ、あのう。」綾子がうまく返事できずにいると、「おつ、哲の友達か。」店のおくから、哲夫そっくりのお父さんが顔を出した。「米田綾子、いっしょのクラスなんだ。」哲夫が大声で説明している。綾子は小さくなつた。周りに、ほかのお客さんがいないのが、せめてもの救いだ。「それで、何にしましょう。」「お、おさしみをー。」「さしみたつて、何がいいんだ。」哲夫におこられているようで、綾子はますます口ごもつてしまう。「おつかいなんて、えらいねえ。今日はタイがおいしいよ。それから、こ

のアジのたたき、哲が作ったんだよ。うちの哲も、よくてつだつてくれます。なあんちゃつて。」お父さんは一人であつて、またおくに引つこんでいった。「今の季節、やつぱりさしみはタイだね。マグロも新せんだよ。」哲夫の口調は生き生きしている。」

この引用部分だけでも、綾子の「先入観」がこわれていく展開が予想される。大声で元気な哲夫と小さくなり口ごもる綾子の対置はステレオタイプにちがいないが、この場合は関係の変容描写を強めるものにもなっている。実はこれは一種の初恋物語、あるいは「初恋の端緒の物語」なのである。標題の「赤い実はじけた」という表現は、綾子のハトコの子代が同級の（一夫君の横顔に夕日が当たつたしゅん間）の心の変化を表したもので、それから一秒だつて一夫のことを忘れたことはないの」という。綾子も（どうせなら、おれはこんなうまいんだぞつて、魚にいばらせてやれるような、日本一の魚屋になりたいんだ。）という哲夫に、（パチン。思わず飛び上がるほど大きな音を立てて、胸の中で何かがはじけたのだ。）となる。夕食の時、（……このアジのたたき、わたしの友達が作ったんだつて。」綾子は、自分の声が大きくなつていてのを感じた。）作者は名木田恵子、漫画「キャンディキャンディ」の原作者でもある。

前に挙げた「えんびつびな」にしても、ある世代の人には直感されたであろうように疎開時代の物語である。その後のある時、シンの小さくなつた鉛筆に顔を書いた「えんびつびな」を二つ（わたし）に与える。（「おめえんち、空しゆうでやけちやつたんだつてな。おひなさまもなくなつちやつたんだろ。……」）という。ところが、その小さな町にもその晩空襲があつてシン・ペイは焼け死ぬ。三人官女も作るという約束も果せなかつた。最後は（そのえんびつびながこれよ。わたしが今もだいにしている、た、か、ら、も、の。）と終る。感動的な平和教材でもある。（作者ながさきげんのすけ）疎開や引揚の世代にとってはアマガエルに「きやあつ」ということも含めてリアリテ

イもある。

ステレオタイプを吟味するということから、それを含む教材を排除せよという主張に短絡はできない。歴史性のある作品を簡単に改作すべきでもないであろう。しかし、かつてのピノキオ論争で「名作であるからこそ差別的」と指摘した人が一面の真実を衝いていたように、ステレオタイプの機能を無視するのも正しくない。

ステレオタイプの全面排除ではなく、葛藤を通じての関係の変容や脱ステレオタイプを描く作品を発見し、活用していくことが必要なのだと思わせる。

（「えんびつびな」の教科書原文の分ち書きをここでは普通の表記に改めた。また、どの作品も引用ではもとの改行を無視した。）

次に挿絵等でのステレオタイプを見よう。文章記述でも、男性に比べて女性は容姿について記述されることが多く、「美しい」「色の白い」等が強調されることが多い。挿絵は男女で肌の色を変えているのが十話あったが、典型的には男の子は小麦色、女の子は白か少しピンクがかった白である。絵の色ちがいは低学年に多く、中学年以上ではそれが文章で示されるが、女の子の肌は白い方がいいという通念にしたがっている。

男の子が野球をして、女の子が花輪を作っている（日書一年）も典型的な対比である。男の子が花輪を作っている絵が対象教科書全六〇冊のうち、二つだけあった。

東書一年で多勢の子どもが遊んでいる絵では、縄跳びは男女いっしょであるが、サッカーやキャッチボールで庭を広くとって遊んでいるのは男の子である。女の子はボールを持っていても場所はとらない。水やりしているのも女の子である。

家事についての挿絵は「りんごの花」（教出三年）のおばあちゃんが炊事、妹がその手伝い、兄弟二人が家畜の世

話とふる炊きという絵が典型的である。男の子が食物を作っている絵は、プリンのもとでプリンを作っている日記の挿絵（学図二年）以外には発見できなかった。他にあと片づけとしての食器はこびの絵はあった。

最後に児童作品での男女の特徴についてふれておこう。遊びについて、男の子の作文では、ザリガニ取り四編、砂遊び三編があったが、女の子では動物や虫の出て来る遊びのものはない。もともと母親が怖がるヤモリを捕まえて外へ逃がしてやる女の子の作文があった。これはステレオタイプ破りといえよう。女の子は花輪つくり二編、鉄棒二編の他、多様な伝統遊びが出て来る。

手伝いでは、女の子は台所関係が多く、男の子はそれ以外になる。

工場見学の作文では、男の子は自動車工場と清掃工場、女の子はパン工場があった。

6 ステレオタイプにとられない姿

これまでのステレオタイプとちがった姿を示そうという意図のうかがわれるものもある。

「ちようの行方」（教出六年）では、ちようのことはよく知っているが、（ぼつとしない）裕太を守るのが陽子である。裕太は（ちように夢中になると、つうつとよたれを）落とすし、よく転ぶし、忘れものも多い。パン食い競争で（だまってパンを持っていても、いいの？……）というような子である。めんどうを見て歩く陽子は、（女の子に任せておけば安心）「裕太の第二のお母さんね。」などといわれる。（でも、ときどき陽子はじれて、裕太をつきとばし、じだんだをふんだ。）だが（よその子供が裕太をからかうのは、がまんできなかった。）（……かたをいからして陽子は歩き続けたものだ。）

受動的存在としての「女の子」のステレオタイプとは対極的な陽子である。「第二のお母さん」というのだから、

これもステレオタイプといえはいえる。だが、「女の子」の型としては、これまで描かれることがあまりに少なかつた「型」、実際には少なからぬ女の子が表現しているのに、「受動性」の陰に追いこまれていくリアリティのある型であるから、通念への挑戦の方に数えたい。

女の子が主人公の話のうちでは、まず「名前をみてちょうだい」（東書二年）では（大男をきりりと見上げて）立ち向かうえっちゃんが出てくる。「宇宙人の宿題」（光村五年）も「勇気がある」女の子であるし、「ヒロシマのうた」（東書六年）では、戦争で亡くなった母親の話をだまっていた強い子が出てくる。

興味深いのは、ステレオタイプの逆のタイプというよりも、葛藤し、変化する姿である。「あくしゅをしてさようなら」（学図四年）に出てくる男の子は、自分の飼猫が近辺のボスだと知って、自分もしっかりしたいと思い、いつもは行けなかつたみよちゃんの家へ行って大きな声でよびかける。いろいろな遊びをして（太郎は楽しくたまりません。）ところが食用がえるをつりにいこうといわれて、かえるが苦手な太郎は（今までの元気がすうつと消えてしまう気持ちでだまりこんでしまいました。）（みよちゃんにおだてられても、しかられても、体がすくんでしまい、耳ががらん鳴ってしまうのです。）（ここでも太郎とみよちゃんがステレオタイプの逆の型を示すが、それも猫をモデルにしっかりと努力しはじめたところの太郎だから、身につまされる男の子は決して少なくないと思われる。児童作品では、前節ですでにふれた母親の怖がるヤモリを捕えて外へ逃がす女の子の作文があった。

II 中学校国語教科書

中学校国語教科書の分析は、藤田由典の卒業論文による。前章の田中奈緒美による小学校国語教科書の分析と同じく、日弁連グループによる一九八九年度の教科書分析と同様の方法で十年後の一九九九年度版の教科書を調べて比較しようというものである。光村図書・教育出版・三省堂・東京書籍・学校図書の五社の教科書が対象になっている。

中学校国語教科書の内容は、大きく分けて物語（小説・伝記・脚本を含む）、随筆（随想・紀行文を含む）、説明文（論説・評論を含む）、詩歌となる。物語文は一九九九年度用でいえば、話数の三四・八％、ページ数で五三・八％を占める。量的比重ばかりでなく、具体的人物の心理描写等を通じて生徒のジェンダー・イメージに影響を与える力も最も大きいと思われるのが物語文である。しかし、日弁連グループの本にもあるように、分類は必ずしも自明ではない。「話者が主人公の物語」と「随筆」の区別がつけにくい場合や「随筆」と「話者の経験が出てくる説明文」の区別がつけにくい場合がある。そこで藤田は、一応分類して分析すると共に合計しての全体の傾向もみることにした。随筆・説明文の場合を含めて「主人公」とは、生徒が感情移入して読むことを期待されていると思われる者をいうことにした。男女双方が主人公と思える場合は半分ずつに分けて計算することも日弁連グループと同じである。

1 「主人公」と筆者

物語の主人公でいえば、十年前に比べて女性が五・二％増加しているが、たいした変化とはいえない。

表Ⅱ-1 物語における主人公の男女比率

	物語の数	男性主人公	女性主人公	双方主人公	不明	男性比率	女性比率
89年	95話	73話	11話	4話	7話	85.2%	14.8%
99年	107話	78話	18話	4話	7話	80.0%	20.0%

表Ⅱ-2 主人公男女別比率（物語ページ数）

	男性主人公		女性主人公	
89年	997.5ページ	83.2%	201.5ページ	16.8%
99年	1005ページ	80.6%	222ページ	19.4%

表Ⅱ-3 出版社別作品数・ページ数（物語）

	光村図書	教育出版	三省堂	東京書籍	学校図書
男性 作品数	17話 85.0%	15.5話 86.1%	15.5話 67.4%	14話 77.8%	18話 85.7%
女性 作品数	3話 15.0%	2.5話 13.9%	7.5話 32.6%	4話 22.2%	3話 14.3%
男性 ページ数	267頁 [○] 87.0%	195.5頁 [○] 83.5%	163.5頁 [○] 63.9%	176頁 [○] 82.2%	229頁 [○] 85.4%
女性 ページ数	40頁 [○] 13.0%	38.5頁 [○] 16.5%	92.5頁 [○] 36.1%	38頁 [○] 17.8%	39頁 [○] 14.6%

表Ⅱ-4 （随筆作者）

	男性作者			女性作者		
	編数	ページ	%	編数	ページ	%
89年	33	188	70.1	17	80	29.9
99年	28	222	65.3	16	118	34.7

表Ⅱ-5 （随筆主人公）

	男性作者			女性作者		
	編数	ページ	%	編数	ページ	%
89年	16	100	66.2	9	51	33.8
99年	12	92	50.8	14	89	49.2

表Ⅱ-6 (説明文作者)

	男性作者			女性作者		
	編数	ページ	%	編数	ページ	%
89年	70	573	89.7	8	66	10.3
99年	62	440	90.5	5	46	9.5

表Ⅱ-7 (説明文主人公)

	男性作者			女性作者		
	編数	ページ	%	編数	ページ	%
89年	30	258	85.4	5	44	14.6
99年	8	47	53.4	5	41	46.6

表Ⅱ-8 (物語・随筆・説明文の合計)

	男性作者		女性作者		男性主人公		女性主人公	
	ページ	%	ページ	%	ページ	%	ページ	%
89年	1758.5	83.5	347.5	16.5	1355.5	82.1	296.5	17.9
99年	1693	80.4	412	19.6	1170	75.6	378	24.4

出版社別にみると三省堂が他社に比べて女性主人公が多いことが目立つ。

随筆・説明文では執筆者Ⅱ「主人公」と考えていい場合と必ずしもそういえない場合とがある。後者の場合、物語同様に主人公ないし話者がとらえられるもののみその立場で読むとし、他は立場を意識しないものと解することになる。藤田は、二通りの分析を行った。後者での「主人公」は当然編数、ページ数とも少なくなる。

物語の場合とは異なり、「主人公」が特定できるものだけをとれば、随筆・説明文は、「主人公」の性別比率は十年前とは大きく変化していることになる。

物語・随筆・説明文の合計も同様に二つの方法で算出して比較すると、作者については大きな変化とはいえないものの、「主人公」の特定できるものにしぼって考えた合計では、随筆・説明文の変化の影響である程度の変化があったといえるよう

表Ⅱ-9 (詩、俳句・短歌 作者)

	詩				俳句・短歌			
	男性作者		女性作者		男性作者		女性作者	
	編数	%	編数	%	首数	%	首数	%
89年	34	75.6	11	24.4	159	80.3	39	19.7
99年	44	80.0	11	20.0	137	77.0	41	23.0

表Ⅱ-10 物語における有職者

	男性 主人公	成人	有職者 (成人中比率)	女性 主人公	成人	有職者 (成人中比率)
89年	73名	50名	29名 (58.9%)	11名	9名	5名 (55.6%)
99年	78名	19名	6名 (31.6%)	18名	10名	3名 (30%)

になる。

詩・俳句・短歌は一作品あたりのページ等は少なく、その他のものと合算するのは適当でないので、作者数の比較にとどめた。十年前に比べて、詩では男性の作品がむしろ少し増えている。文学史的に有名な作品を示すことになるからであろう。

2 性別役割分業・ステレオタイプ

上記の表で明らかに見てとれることは、男女とも「有職者」(記述によって職業が判るもの)が減っていることである。藤田はこれが日弁連グループの本に「影響されたかどうかはわかりませんが……疑問に思います。」「たしかに少なくなっただけによってあからさまに男女の職業差別というものがあまり見えなくなってきました。しかし、それは問題にしなければならぬそのものを消してしまっている訳ですから、何の問題解決にもなりません。」と述べている。

同じことが家事労働にもいえる。主人公や主人公の親が家事を行う場面もほとんどなくなっている。しかし、家事労働を直接に描いていなくても母親像はステレオタイプ化されていて、

表Ⅱ-11 主人公の親の有職者

	主人公の父	有職者	主人公の母	有職者
89年	17話	10話 (58.8%)	27話	1話 (3.7%)
99年	16話	3話 (18.8%)	24話	1話 (4.2%)

表Ⅱ-12 物語の中の有職者

	男性のみ	女性のみ	男女両方
89年	31話	7話	25話
99年	12話	3話	1話

「食事を知らせるいつもとは少し違う声」（一塁手の生還・教出など、女性・母親と家事、子どものめんどうを見るものという姿は当然の了解とされている記述は多いという。

生徒作品「自分で料理をしてみて」（三省堂）では、女生徒が学校で習ったカレーライスを家で作ることになる。「佳奈枝ちゃんも料理ができるようになったのか楽しみだなあ」という家族の期待のことばにさらにやる気を出す。ところが手間がかかるので「だれかー！手伝ってー！」というのに誰も手伝ってくれない。そこで、自分もふだん手伝いを求められたとき「ええっ。」とか「今はアカン」とかいつていたことに気付く。「ああ、いつもおばあちゃんやお母さんは今のわたしより手間のかかる料理をしているのだから、ほんとうに困っているだろう。」と思う。「結局、サラダづくりを姉がしてくれることになり」安心して料理できた。男性では「祖父が『まだご飯じゃないのか』と台所へ入ってきました。時計を見ると七時を過ぎていました。いつもなら、夕食を食べている時間です。祖父は私がつ作っている『仕方ない』と思ったのか、黙って台所から出て行きました。」

ほほえましいといえればほほえましく、リアルといえればリアルな作品である。これは読み手と同世代の作品であるだけに、女子家事のステレオタイプをいっそう強化し得ると藤田は考える。これもバランスの問題ではあろう。

女らしさ、男らしさを明示的に強調するものは、計量的な比較は困難であるが、八九年より減っているようである。藤田が指摘した例では、かぐや姫のように容姿の美しさに、地位の高い男性から結婚申し込みが殺到するという提示（個性・能力より容姿）の問題があった。

III 道徳副読本

「道徳」は教科ではないから「教科書」は存在しないが、ほぼそれに相当するものとして「副読本」がある。（「主読本」が別に指定されている訳ではない。）副読本を編集・出版する側は、学習指導要領に示された徳目に対応させて、各教材を配列している。内容は物語風のものが多いから国語教科書と同様に、「主人公」の性別を数えることができる。日弁連グループは、徳目ごとの主人公性別を示すことで、全体として男中心社会を反映しているだけでなく、「探究心・合理的精神」「創意工夫・進取」といった能動的態度は男性的徳目とみなされていることを鮮かに示したのであった。

国語教科書と同様に十年ほど経過したあとの副読本に変化が見られるかどうかは分析・比較できるはずである。二〇〇〇年度の田中欣和ゼミでは当時の三回生八人で分担してその検討をやってみた。しかし、日弁連グループの使用した副読本の後継本とみられるものを、小学校では三シリーズ、中学校では四シリーズ（日弁連グループは表等に示される分析資料としては、当時の「旧指導要領」準拠の小学校七シリーズ、中学校四シリーズを使用している。）しか入手できなかった。

各学生が宿題として調べたものを前述のように小学校は大辻俊作、中学校を松浦未来（松浦は自分の卒業論文の

一部にも利用した)がまとめたが、作業の精粗もあり、まとめ役の二人は苦勞したようであった。学習指導要領の変化、入手したものの限界もあり、国語に比べて日弁連グループとの比較という点で十分なものとはいえない。しかし、徳目別検討など国語以上に興味深い点があるので、不十分さを自覚しつつ、ご参考までに分析結果を示したい。性別比率は、性別不明や男女共主人公のものを除外して計算した。

1 小学校・道徳

今回の分析に利用した副読本・指導書は次のものである。(いずれも各学年用、一〜六)

学校図書(学図)『かがやけみらい』

東京書籍(東書)『道徳』

大阪書籍(大書)『生きる力(大阪府版)』

タイトルからいっても、日弁連グループの資料の後継版とはいえないかも知れないものが含まれている。

ともかく、全話の主人公の女性比率を調べると四一・一%になり、日弁連グループの時の三一・八%より一〇ポイント近く上昇している。出版社別では、学図三八・八%、東書四二・一%、大書四二・四%であった。日弁連のときは、大書・東書は相対的に高い三五〜三八%のグループに含まれていたが、少しずつ上昇しているようである。学年別に見ると三社合計で女性比率は、一年四一・五%、二年四四・〇%、三年三八・八%、四年四八・八%、五年三八・二%、六年三五・二%であった。

徳目別では日弁連グループとの比較のために対応する分類をすることが困難な点があったので、大辻のまとめによってそのまま示すが、「地域・郷土」「自己の向上」「勇氣・強い意志」などで特に高い男性比率を示すことに注目

表Ⅲ-1 徳目別主人公性別比率（小学校）

徳目	男主人公	女主人公
健康・生活習慣	★ 67.2%	32.8%
勇気・強い意志	★ 77.8%	22.2%
責任・自主規律	★ 60.0%	40.0%
真実・人生開拓	★ 77.8%	22.2%
自己の向上	★ 78.6%	21.4%
礼儀	43.5%	★ 56.5%
人間愛	38.2%	★ 61.8%
友情・信頼	★ 70.7%	29.3%
健全な異性観	★ 73.7%	26.3%
広い心・謙虚	50.0%	★ 50.0%
自然愛・感動	★ 64.0%	36.0%
生命の尊重	57.1%	42.9%
生きる喜び	45.0%	★ 55.0%
役割・責任	★ 72.7%	27.3%
秩序・規律	43.3%	★ 56.7%
正義・社会連帯	36.0%	★ 64.0%
奉仕・福祉	53.0%	47.0%
家庭・家族	★ 70.0%	30.0%
学級・学校	33.7%	★ 66.3%
地域・郷土	★ 100.0%	0.00%
愛国心・伝統	44.4%	★ 55.6%

したい。★印は男で六〇%以上、女は五〇%以上の比率を示すものに付けた。日弁連の時は五〇%以上の女性比率は「勤労協力」五七・九%と「人類愛」五二・八%の二項目のみであったが、今回は八項目に増えた。

「学級・学校」をはじめ、「正義・社会連帯」「人間愛」「礼儀」「秩序・規律」「愛国心・伝統」「生きる喜び」「広い心・謙虚」である。

表Ⅲ－２ 小学校副読本7種の徳目別男女比率（日弁連グループ）

旧学習指導要領の徳目	男 (%)	女 (%)	教材数
1 生命尊重・健康安全	★69.7	30.3	41
2 礼儀・時間の尊重	51.4	48.6	35
3 整理整とん・物の使い方	54.3	45.7	38
4 自主自律	★75.0	25.0	45
5 自由と責任	★78.4	21.6	38
6 正直誠実・明朗	★86.8	13.2	38
7 正義・勇氣	★80.3	19.7	35
8 不とう不屈	★80.3	19.7	41
9 思慮・反省・節度	★88.2	11.8	41
10 自然・動植物愛護	★69.7	30.3	42
11 敬けん	52.9	47.1	40
12 個性の伸長	★72.2	27.8	28
13 向上心	★60.8	39.2	39
14 探究心・合理的精神	★93.8	6.3	33
15 創意工夫・進取	★88.3	11.7	35
16 親切同情	52.7	47.3	40
17 尊敬・感謝	★66.1	33.9	37
18 信頼・友情	★84.7	15.3	43
19 公正公平	★70.0	30.0	39
20 寛容	★71.6	28.4	38
21 規則の尊重	★74.4	25.6	39
22 権利と義務	★68.8	31.3	28
23 勤労協力	42.1	★57.9	40
24 公共心・公德心	★63.2	36.8	41
25 家庭愛	53.4	46.6	44
26 愛校心	53.7	46.3	30
27 愛国心	★61.4	38.6	38
28 人類愛・国際理解	47.2	★52.8	39
計	68.2	31.8	1059

教科書の中の性差別

2 中学校・道徳

使用した副読本・指導書は次のものである。いずれも各学年用（一〜三）。

大阪書籍（大書）『生きる力』

日本文教出版（文教）『明るい心と生活』

東京書籍（東書）『明日をひらく』

教育出版（教出）『私たちの道』

全話の主人公女性比率は算出していないが、出版社別でいうと、文教四九・四％、東書四三・二％、教出三五・三％、大書三二・七％で、全社で五〇％未満である。日弁連グループの時（タイトルは変っているものがあるが、出版社は同じ四社）は、女性比率三七・六％であったから、今回の四社平均四〇・二％は少し上昇ということになる。徳目別でも差は縮少している。なお、大辻・松浦の計算は性別不明や男女共主人公のものなどの処理が違っていたので（計一〇〇％とならない）日弁連との比較ができるように田中欣和が加工した。

表Ⅲ-3 徳目別主人公性別比率（中学校）

	男	男（10年前）	女	女（10年前）
生命尊重・節度と調和	★ 68.2%	57.1%	31.8%	42.9%
望ましい生活習慣	57.1%	★ 72.2%	42.9%	27.8%
積極性・強い意志	★ 64.3%	★ 66.7%	35.7%	33.3%
自主自律・責任	★ 77.8%	★ 64.3%	22.2%	35.7%
広い心・寛容・謙虚	28.6%	52.9%	★ 71.4%	47.1%
勤労・真の幸福	★ 86.4%	★ 70.0%	13.6%	30.0%
真実・人生の開拓	★ 75.0%	★ 66.7%	25.0%	33.3%
人間愛	52.3%	36.7%	47.7%	★ 63.3%
自然愛・感動	★ 87.5%	★ 66.7%	12.5%	33.3%
信頼・友情	★ 66.6%	★ 69.2%	33.4%	30.8%
健全な異性感	59.1%	42.9%	40.9%	★ 57.1%
共同生活の充実	54.8%	46.9%	45.2%	★ 53.1%
集団生活の向上	50.0%	★ 68.4%	★ 50.0%	31.6%
社会連帯・偏見の克服	54.8%	★ 64.7%	45.2%	35.3%
権利義務・法秩序	★ 100.0%	★ 87.5%	0.00%	12.5%
愛国心	54.6%	★ 71.9%	45.4%	28.1%

IV 高校日本史B教科書

宮沢太一は、卒業論文で高校日本史B教科書を分析したが、前章までのものと異なり、日弁連グループの仕事と比較を意図したものではない。(日弁連グループの検討対象は小・中学校教科書であった。)

宮沢は、まず一九九七年発行の教科書六種における登場人物を領域別・性別に数えあげた。いうまでもなく男性が圧倒的に多い訳であるが、時代や領域、また出版社によつてどれくらい差があるかを調べた。

次に、アメリカでの先行研究に示唆を得て、大学生が五分以内に想起できる歴史上の人物を調べた。きかれたら「知っている」人物ではなく、能動的に再生できる人物は歴史教科書における重要度とはまた別の比重を示すかも知れないからである。(文学部のある授業の教室で行ったが、行事の関連で出席が少なく、六十名であった。)

1 教科書の登場人物

合計しての人数では、女性は三・七％に過ぎない。教科書別では山川の『日本の歴史』で四・九％が多く、他は三％台であった。

政治史・文化史と大別したとき、文化史の方がいくらか女性比率が高いかと思われたが、それは平安文化の印象が強いためのものであると判った。平安文化史に関しては女性が一八・三％である。女性の登場が多いのは、女性君主の多い奈良時代までの政治史であった。政治史の中の女性九十二名のうち、奈良時代までに登場するのは四十名であるが、ほとんどが女性君主(卑弥呼・孝与を含む)で、あとは光明皇后が六種に、文化史の額田王が四種に登場する。四十名のうち三十名が女性君主になる。(領域別・性別の比率は表IV-2 参照)

なお、政治史・文化史の区別はつねに明確なものではない。額田王はここでは文化史にいたれたが、平徳子Ⅱ建礼門院は政治史に数えた。平塚雷鳥は伊藤野枝らと同じく政治史にいたれたが、与謝野晶子らと共に文化史に数えるべきという考え方もあろう。宮本百合子は文化史にいたれた。

文化史では江戸時代から近代（戦中まで）で男は政治史以上に多いが、学生などがおぼえていない人物も多数含まれていると思われる。

時代別に女性比率を示すと、〈飛鳥時代まで〉一四・六％、〈奈良時代〉二二・二％、〈平安時代〉七・五％、〈鎌倉時代〉二・〇％、〈室町時代〉〇・五％、〈安土桃山時代〉四・〇％、〈江戸時代〉一・一％、〈近代（明治～第二次大戦終了）〉三・八％、〈現代（第二次大戦終了後）〉一・六％となる。古代で比較的高い。

表IV-1 高校日本史B（1997年発行）6種の登場人物

時期 \ 領域・性	政治史・男	政治史・女	文化史・男	文化史・女
飛鳥時代まで	154	24	10	4
奈良時代	70	16	45	0
平安時代	318	16	67	15
鎌倉時代	183	6	162	1
室町時代	219	2	147	0
安土桃山時代	107	0	38	6
江戸時代	457	9	548	2
明治～第2次大戦終了	440	18	482	18
第2次大戦後	109	1	70	2
計	2057	92	1569	48

検討対象	国書刊行会	『最新日本史』
	実教出版	『高校日本史B』
	清水書院	『詳解 日本史B』
	第一学習社	『新日本史B』
	山川出版社	『高校日本史』
	同上	『日本の歴史』

表IV-2 日本史日登場人物の領域・性別

領域	男	女	計	女性比率
政治史	2057	92	2149	4.3%
文化史	1569	48	1617	3.0%
計	3626	140	3766	3.7%
文化史比率	43.3%	34.3%	42.9%	

教科書の中の性差別

六種の教科書に同一人物が登場すれば六名と数えるので、全体の数字が小さいときは一人の人物がそれなりの%として示されることになる。例えば、安土桃山時代では出雲阿国ただ一人で4%になる。鎌倉時代では北條政子六の他は阿仏尼一のみである。(現代)では、政治史として土井たか子のみ、文化史で長谷川町子、池田理代子、それぞれ一種類に登場するのみである。

宮沢は「女性に関する記述を調べたところ、女性の地位の変遷について系統的な記述がある教科書」はなく、これでは「近代以降の女性解放運動の意義」を理解するために「非常に不十分」と述べている。

固有名詞としてではない女性に関する記述は平安時代に登場するが「十二単といわれる女房装束が正装」(清水書院、貴族の結婚についての山川『日本の歴史』の特集(「子供はそれぞれの女親の家で養育されるのが常」という記述が含まれる)、さらに第一学習社は結婚の型について平安時代から江戸時代までを記している。鎌倉時代では、山川『日本の歴史』に「女性と家」という題で、鎌倉新仏教の信者に女性が多くいたとか、嫁ぎ先での妻・母の地位は高く、家長が亡くなった場合に家を代表することもあったという記述がある。室町・安土桃山時代では、女子の礼服についての国書刊行会のもの程度である。江戸時代で、女性と離縁状についての記述が清水書院と山川『日本の歴史』にあり、男尊女卑の風潮、女性の地位低下については山川の二種と第一学習社のものが記述している。近代では青踏社についての記述は六社共にある。実教出版は大正時代に

女性の職種が増えたこと、第一学習社では一八九〇年代の女性の風俗についての記述がある。第二次大戦中の「女子挺身隊」については清水書院、国書刊行会、第一学習社に記述がみられる。戦後では女性の活動が盛んになっていくにもかかわらず、それについての記述があるのは清水書院のみという。

このようにみると、「変遷」を理解するための材料がない訳ではないのだが、それを系統的に認識させるための工夫はたしかに不十分である。(現代)の弱さは、あるいは「公民」の方にまかせればよいとの考えからかも知れないが、歴史を背負って現在と未来に生きる世代のための教科書としてそれでいいのであろうか。「地理・歴史」と「公民」の教科分割は歴史教育にとっても不幸なことであつたらう。

2 大学生が5分以内に想起した歴史上の人物(男女別)

まず目立つことは「想起した人物」の絶対数の少なさである。「人物」の性別計で八・七人に過ぎない。教室現場での観察によると一分以内に何人か書き、あとが思いのほかに出て来ないので焦り出したり、あきらめたりした学生が多かつたようである。時間を二分とか三分にしてもたいして変らなかつたと思える。「知っている人物」「いわれてみたらおぼえている人物」は勿論はるかに多数のはずである。田中欣和の日常観察では、学生たちは歴史上の事件や人物をバラバラにおぼえている。壮大な「物語」として受け取っていないので、一人を想起しても関連や対比で続けて出て来るものが少ないのである。(ついでにいえば、最近よく話題になる「大学生の学力低下」問題は、分数や小数云々よりこういう点に着目して論じるべきであると思う。)

歴史上の人物の男女差は大きい。七・一八対一・五二ということは女性比率一七・五%である。しかしこれでも、前節でみた教科書の登場人物での女性比率三・七%よりはかなり高い。少ないから目立つということがあろう。(時

代限定の影響もある)

坂本竜馬が西郷・大久保より多く、六種の教科書中二種に出て来るだけの淀君が六種すべてに出て来る和宮より上位にある。(淀君は二十名の男子学生中七名が記名し、四十名の女子学生では一名のみであった。)教科書だけでなく、歴史小説やTV番組で補強されてこそなじみ深い「歴史上の人物」になることが判る。

回答者の性別や地歴・公民関係で高校の時重点的に勉強した科目別にも調べてみた。どのグループも、男の一位は徳川家康、女の一位は与謝野晶子で変わらない。平均記名数は回答者性別では大差ない。重点的に勉強した科目別で人数は当然ある程度の差がある。日本史グループでは歴史上の人物・男が七・八九名と女は一・七一名、世界史グループでは男五・九二名と女一・四六名、その他グループでは男五・三二名と女一・一六名であった。

それにしても、決してやさしいとはいえない入試問題を解いて地歴・公民系ならおそらく七割以上の点をとった学生が多いと思われるが、短時間に再生できる歴史人名とい

教科書の中の性差別

表Ⅳ-3 学生60名の想起した歴史上の人物(男性)

順位	名前	記名数	記名率(%)	順位	名前	記名数	記名率(%)
1	徳川家康	52	86.7	14	木戸孝允 大塩平八郎	7	11.7
2	徳川家光	31	51.7		大隈重信 東条英機		
3	伊藤博文	29	48.3	18	徳川秀忠 田沼意次	6	10.0
4	徳川吉宗	27	45.0		松平定信 森鷗外		
5	坂本龍馬	25	41.7		明治天皇 犬養毅		
6	徳川慶喜	22	36.7	24	新井白石 伊能忠敬		
7	西郷隆盛	16	26.7		昭和天皇	5	8.3
8	徳川綱吉	15	25.0	27	6名	4	6.7
9	石田三成	11	18.3	33	6名	3	5.0
10	板垣退助 原敬 福沢諭吉 井伊直弼	8	13.3	39	9名	2	3.3
				48	32名	1	1.7

小数第二位を四捨五入

記名数4以下は割愛

登場人物数…79名

回答者一人当たりの平均記名数…7.18名

表IV-4 学生60名の想起した歴史上の人物（女性）

順位	名前	記名数	記名率 (%)
1	与謝野晶子	40	66.7
2	平塚雷鳥 津田梅子	17	28
4	淀君	8	13.3
5	樋口一葉 和宮	3	5.0
7	市川房江	2	3.3
8	中山みき	1	1.7

小数第二位を四捨五入

登場人物数…8名

回答者一人当たりの平均記名数…1.52名

えばこの程度であることに私達は危機感を持たざるを得ない。調査対象となった学生が一人でも多く想起しようと努力するという条件はなかったとはいえ、遊び半分にせよ、せめてこの倍は想起できようというのが宮沢太一と調査プランを討議した段階での田中欣和の想定であった。

おわりに

「男女共同参画」「男女共生」がさかんにいわれる十年の経過のあと、「教科書は変わった」といえるのであろうか。編集者の配慮のあとがみえる所もある。しかし、全体としてはたいして変わっていないであろう。中には悪しき配慮と思われるものもある。藤田が指摘するように、男女共に有職者率が低下するなどはその一例であろう。

教科書評価の方法として、主人公等登場人物の性別比率は十分なものではないことはいうまでもない。しかし、こういう方法であっても視えて来るものがあるのもまた事実である。

学校教育は世の中を「より良くする」働きを期待されている。だから、現状の現実よりは理想主義的なものをより強く含んで当然である。しかしながら、教科書はまた現実を反映せざるを得ないし、ほとんど反映し

ないような教科書があれば、それは現状批判・変革の力を育てないであろう。女性比率が上がりさえすれば良いという訳ではない。

たとえば歴史の場合、固有名詞があとへ残るような人物はこれまで男が多かったのだから、男の方が登場人物に多くなるのは当然といえれば当然である。しかし、戦後史における登場女性が六種の教科書でわずか三名というのは、余りにも極端である。

問題の一つは、固有名詞では残らない民衆が歴史を作つて来たという感覚が作り手の側にどれくらいあるのかということである。戦後のある時期まで、教科書に社会史・経済史・民衆史などの成果をもっと入れようという風潮があった。政治史・文化史を通じて固有名詞が重要である歴史、一種のエリート史観がその後強化されていったと思う。そうでなければ、固有名詞の比率はともかく、女性史の成果がもっと反映されているはずであろう。

国語にしても、もっと多様な人物（子どもを含めて）が主人公であるような物語が、創作され、評価されるようになれば、あり様は変わって来るはずであろう。

国語に比べれば格差が縮小している道徳の場合は「評価の定まった文学作品」に相当するものがあまりないので、編集者の自由度がより高かったのだと考えられる。

本稿の基礎を作つた学生諸君は、ほぼ一樣に、教科書と自分たちの生活感覚・生活経験とのズレを感じている。一例をあげると、中学校国語教科書を分析した藤田は関西大学応援団長であったが、関西の応援団の中でも関大は古典的なスタイルを保持して来た方である。団長として新撰組を連想させる羽織袴姿でリードしてきた。かつてはバンカラ関大の男の象徴が応援団であった。その応援団でも黒詰襟学生服のリーダー部は相対的に少なくなり、チアリーダーはもとより、吹奏楽部も女性部員が多くなり、数年前から女子学生の副団長が選ばれるようになった。

このことに限らず、どの大学でも「女子学生の方が元気」といわれるようになって久しい。そういう中で生きている学生諸君からすれば、教科書編集側の（検定を常に意識しての）感覚は疑問に思えて不思議ではない。

一方、近頃の若い世代は頼りないなどといわれることも多い。戦後のある時期までに比べると「自分たちこそが明日を創る」という抱負が弱くなっているのは確かであろう。その点でたしかに「悪い時代」である。

田中欣和は、若くても、学生でも世の中に問題提起はできる、意味ある発信はできると実感させたいものだと言々考えてきた。人権教育関係で読みがいのある卒業論文は短くして雑誌「解放教育」に掲載してもらおうなどのこともして来た。今回も「解放教育」誌への連載企画に持ち込むことも考えたのであるがこの「紀要」に出すこともまた意義あることと考え、室員である私がまとめ、私と学生集団（ゼミ）の連名で掲載することを室会議で認めていただいた。いろいろな意味で感慨がある。「青年に発言させよ」というスローガンを多くの大学教師と共有できるようになりたいと思う。今回、このかたちでの掲載を承認していただいた研究室の室長はじめ同僚諸氏に感謝する。

(1) 本稿の基礎となった卒業論文

I 田中奈緒美「教科書にみられる男女差別——〇年前と比較して」

II 藤田由典「教科書の中の男女差別——中学国語教科書の〇年前との比較」

IV 宮沢太一「教科書に潜む男女差別——高校日本史Bを検討して」

(2) 本稿III章の基礎となった作業参加者

植月喬士 大辻俊作

川又祥和 竹井正江

宮沢太一 吉川和彦 吉田努

(3) 本稿I～III章での比較対象

伊東良徳・大脇雅子・紙子達子・吉岡睦子『教科書の中の男女差別』（明石書店、一九九二）